

生まれてきてよかったのか

ほったすなお
堀田 素生

「また虐待死だって」

「可哀想。愛せないなら産まなければよかったのに」

ある喫茶店の片隅で、私は反出生主義の特集が載っている思想誌をめくりながら、どろどろに甘いクリームソーダを吸い込む。蛍光グリーンの人工的な色彩が陽だまりに溶けて、これまた蛍光グリーンの陽だまりを窓辺のテーブルの上に落としている。隣席は女子高生二人。柔らかな日差しの中だった。

「人間なんて不完全な生き物なのに。その不完全な人間が人間を産むなんて。人間は苦痛を感じる意識を持った存在なのに。そんなのをこの世に創り出す権限を人間ごときに握るなんて、間違ってるよ。」

片方が捲し立てるように、何かこの世界に隠された壮大な苦しみを告発するかのように泡唾を飛ばす。反

出生主義。子どもを生むことを批判する思想だ。理由としては様々な主張があるが、「人生には苦痛を感じるリスクがあるから、子どもの同意を得ずに一方的にそんなリスクに晒すのは理不尽だ。だから生むべきではない。」という主張がとりわけ目立つ。まさしく、この世界から根本的に苦痛を取り除く為の知恵といったところだろうか。この思想が最近、インターネットやSNSを介して主に若年層の間で広まっている。現実が上手くいかない原因を生まれてきたことそのものに求め、生きづらさの鬱憤晴らしとして自分を生んだ親を恨む。そんな方法を彼らは發明したらしい。

のどかで、暖かで、この世の地獄など知らないような空気に、隣席の苦しい会話がどろどろと混ざり込んで行く。クリームソーダに浮かぶ溶けたアイスの濃密なバナラの香り。むせそうになりながら、切実な正義の叫びを飲み込む。飲み込むと、その言葉は私の存在と同化して、俄かに問いに巻き込まれる。私は生まれて来ない方が良かったのだろうか。

「もういい。こんな親の家にいるのは大嫌いだ。行く。ほら、出かける準備しろ。一緒に死のう」

十一歳のあの日、母が発した言葉に動揺し私はただ

何も返せなかった。ばくばくと打つ心音に混ざって、数秒前まで響いていた母の怒号が耳奥でまだ私の脳髓を殴りつけている。夜の湿気が肌にへばりついて、意識は現実を拒み、全身を冒す吐き気の中で霧がかかったように朦朧としていた。

暫くして私がやっとの思いで上唇を下唇から引き剥がし、「それは出来ない」と、その提案を却下する。激昂した母親はまず始めに「意気地無し」と私を怒鳴りつける。心臓が嫌な音を立てて跳ね上がり、全身の血が攪拌される。続けて母親は私の存在を否定する。こんな時いつも漏れなく聞こえるのは、「産むんじやなかった」というぼやきだった。

「産むんじやなかった」。これを何度聞いたか分からない子ども時代。その都度心の中で「生まれてくるんじやなかった」と何度言ったか分からない。

望まない妊娠と、生後すぐの離婚、非現実的な育児計画。勿論それはすぐに頓挫し、祖父母や身内が私の世話を焼きながらこう言った。

「欲しくなかったなら産まなきゃ良いのに」

母は離婚後直ぐに何もしなくなり、引きこもった。食べて、怒り散らかし、寝るとい閉じた円環の中で生きるようになった。

私の生命は、誰も望まなかった。私自身ですらも。

しかしそうであつても、小さな子どもは無力だ。自力では生きられない非力な生命として、世話を必要とする。私は間違えて生まれてきただけの、必要な存在ではないにもかかわらず、世話をさせて周りに負担をかけた。そんな邪魔者の意識を背負ったまま大人になった。だから私は自分を好きになつてはいけないし、生まれてきたことを常に後悔しなければならぬ。そう思つて生きてきた。耐えきれず母親と十五歳で縁を切つたあともその気分は続いていた。この世に生を受けたなら、こんな悪夢を知ることもなくただ甘やかな乳房に抱かれたままこの生を終えたかった、と何度思つたか分からない。

にも関わらず、私は今こうして問うてゐるのではないか！「本当に生まれてこない方がよかつたのだろうか」と。そんなの、毎日のように母親から存在を呪われていたあの頃は問う余地すらなくらい自明のことだったのに。

人生の価値と存在の価値は違う。存在の価値を誰からも認められなくとも、自分でも認めることが出来なくとも、この人生の価値を判断する自由は残されている。

生みたい、生みたくない。生むことが出来る、出来ない。私たち人間はそんな偶然と必然の緋い交ぜから生まれた存在だ。しかし生は本質的に、させられるという受動的な体験である。生まれてくるかどうかは選べない。それを自ら選んで生きる、という能動的体験へ転換するには、積極的な生への意思が必要なのだ。

受動的な世界に留まったまま、自分を生んだ親や子を残すという人間の行為そのものを恨むか。それとも能動的に生を選び取り、その酸っぱさも甘さも辛さも抱いた豊かな味を愉しむか。反出生主義は、その選択の機会を奪ってしまう。生まれて来なければ確かに受動は無いが、能動も無い。自ら生きることを選び取るという体験も、享受することは出来ない。

自らの生をどのように捉えるか。それはまさにその生の只中にいる人間にしか解り得ない。生を享けることの歎びと絶望。それは何人たりとも、産む母親にすら知り得ない、ただ当の本人だけの隔てられた世界である。その不可視性は夜のように暗い闇だ。何も無いように見えて、可能性は夜のように暗い闇だ。何も無いような夜の中で静かに始まる生命は、寄る辺なき幼生として力なく唇を蠢かし、与えられるかも定かではない栄養に満ちた甘い乳を求めるのだ。

その神聖な繭の中を、生まれてこない方が本人の幸せのためだとか最もらしい理屈で引つ掻き回そうだなんていいこととは言えない。しかし、それでも私たちは幸福を願ってしまふ。自分や誰かの、生まれてくる生命の幸福を。例えこの世界の神が無慈悲で善悪の判断を持たざる者であったとしても、祝福されない生を生きて死ぬ、そんな悲しい物語をひとつもこの世界に許したくない。それもまたひとつという生き物のあえかな祈りだ。だから精一杯の抵抗として、生まれないことで断つ。幸福の可能性も不幸の可能性も。それが、反出生主義というものなのかも知れない。

しかしもし生まれてこなければ、生きることを望むことすら出来ないのだ。そしてこうして、生まれてきてよかったのか問うことすらも叶わない。それは幸福なのだろうか。

否、幸福だったとしても感じられないだろう。何しろ生まれてこないのだから。生まないことが愛だから生まないという選択をしたところで、その愛を受け取る子どもはこの世に存在しない。不幸を望まないばかりにそんな二律背反を選びとってしまう。もし反出生主義を多くの人が支持するようになって、誰もがそうした世界が来るとしたら。

誰も望んでいないのに生まれてきてしまったこと、その事実とは通奏低音のように常に私の生に鳴り響き続けている。人生のあらゆる時に、私は生まれてきてしまったことを悔いた。「産まなきゃ良かった」という言葉は、呪いという形で何度も何度も、繰り返して私の世界に現れる。その反復する不快な音楽を止めるため、私はこの生を終えたかった。しかし、いま人生を降りると子ども時代の私が報われない。何のためにあの苦痛を耐え抜いてまで生き延びたのか分からないじゃないか。

それに私はいま少なくとも、クリームソーダを飲む幸福を享受している。今ここには、更なる苦しみが降りかかる可能性と同時に、今飲んでいるクリームソーダを引き続き美味しく飲める可能性が混在している。死を選ぶことは今美味しく飲んでいくクリームソーダをわざわざぶちまけるようなものだ。そうだったら覆水盆に返らずである。覆クリームソーダ盆に返らず。それで良いのか、自分よ！

しかしそう言って過去の損失を少しでも取り戻すために死ではなく生きることを選び取った末、もしかしたら傷口を拡げることになるかも知れない。そうであ

っても、私たちは事後にならなければその選択が良かったかどうかは分からない。生まれてきてからでなければ、生まれてきてよかったかどうかは分かりようがないのだ。余りに大きすぎる損失を一生埋めることが出来なかったとしても、悲壮な音楽が鳴り続けたとしても、それでも私は陽だまりの中でクリームソーダを飲んでいたい。私が生きたいのはそんな気だるい肯定だ。

過去の怨嗟を晴らすかのように、凶々しく生の悦びをしゃぶり尽くしたい。それこそ、一杯のクリームソーダを飲む機会すら無駄にしたくない。見上げる様ながめつさで息をしていたいのだ。この選択が正しいかどうかはそれこそ、死の瞬間までわからないだろう。人生の最終的な総合価値は死の瞬間まで確定しない。人生とは常に何が起こるか予測不可能だからだ。しかしそうであっても、不幸な気分を幸福を追い求める原動力として利用することが、一番自分自身に対して誠実なのではないだろうか。私自身が幸福を望んでいることは確かなのだから。

思えば母の「産むんじゃないかった」という言葉も、彼女自身に対する「生まれて来なければ良かったのに」だったのかも知れない。祖母もまた「産むんじゃないか

った」が口癖だった。もちろん、その呪いは娘である私の母に向けられている。傍にすることは出来なくとも、生まれてきてよかったと思える生の終わりを彼女が迎えられることを私は願って止まない。同じ呪いに生きていく人間として。

私はとりあえずまだ死を選ぶことはしない。過去の不幸に囚われ、その清算に躍起になっている以上は、これは純粹な意味での「生きたい」とは違うかも知れない。しかし私は、過去に囚われることだって悪いことばかりではない、ということをはっきりと言うことができるだろう。それを未来を良くする力に出来るのなら。そう考えれば、私は既に、生を自らの意志で引き受けたのかも知れない。

あとがき 「生まれてきてよかったのか」 執筆に寄せて

本稿は先日、第16回文芸思潮エッセイ賞に応募したものを、誤字や表現上不自然な部分等再度校正したものである。この度の「みなせ」への入会に際して、何か一本寄稿するという所で判断に迷った。これが掲載させて頂く初めの一作となるからだ。そしてこの『生まれてきてよかったのか』は私がエッセイとして執筆

した文章の初めの一作でもある。ならばと、初回の寄稿ではこれを選ぶことにした。

この題名は実のところ、昨年出版された森岡正博先生の書籍『生まれてこないほうが良かったのか?——生命の哲学へ!』に意図しないうちに似たものとなってしまった。森岡先生は反出生主義についての研究に取り組んでおられる哲学者だ。二十五歳の時、森岡先生の論文に出会い、反復する問いの中でもがき苦しんでいた私は夢中になって幾つも丁寧に拝読させて頂いたのを覚えている。

なおタイトルが似てしまったことに気付いたのは、書いている最中ではなく、書き上がった時でもなく、応募原稿を既に出した後だった。それだけ私の意識の深い場所に、この本の存在が根付いていたのかも知れない。

生まれてきてよかったかどうかというシンプルな問いは、今の「この私」を創り上げていると言っても過言ではないほど私にとって根源的なテーマである。私は「人間は」生まれてこないほうが良いのかどうかという問いに対しては答えを持っていない。あくまでも私の問いの対象は「この私」の生だが、やはりまだ答えを出すことが出来ずにいる。二十代最後の年、最も

興味深いテーマにこのような形で取り組むことが出来、幸甚の至りであると言えよう。

そして、まだ筆を執って日も浅い私を歓迎し、このように執筆の場を提供して下さったことに感謝したい。何かを大きく揺さぶることはできなくとも、誰かの心の片隅に少しだけ残る、この世界のごく小さな欠片になるようなものを書いてみたいと思っている。拙い文章で恐縮です。最後にここまで読んで頂き、ありがとうございます。

2021.5.30 よく晴れた自宅にて